

## 落語を通して見えてくる明治の社会

『明治維新と噺家たち 江戸から東京への変転の中で』 柏木新著

想像してみてもほしい。

江戸城からは將軍がいなくなり、チヨンマゲは消え去り、突然、西洋の文物がどかどかと入ってくる。明治の「こ一新」で一夜にして国が一変したのである。

歴史の教科書は、政府の動きを記すのみで、この時、一般庶民が何をどう感じていたかは、知るよしもない。だがいちばん翻弄されていたのは町の人間である。

本書は、底辺で生きる庶民の代表のひとりとして、「噺家」に焦点を当てる。彼らの動きを追い、彼らの目で時代を切り取ることで、「町民から見た明治時代」を再現しようというわけだ。

それだけではない。今日、「古

典落語」と呼ばれる落語の多くは、

明治維新の頃に創作されているのである。例えば怪談噺の傑作「怪談牡丹灯籠」、人情噺でいえば、「文七元結」(以前あった話を補筆改訂)や「にゆう」、「塩原多助一代記」も明治に創られた落語だ。

また、女性、自由民権運動家、英国人……多様な属性の人たちが噺家になったのも明治の特徴だ。落語自体も変わった。

明治の落語界の立役者といえば、三遊亭圓朝だが、圓朝は落語の演出を一変させた。特に怪談噺。江戸の怪談噺といえば、前座が扮した幽霊が登場するなど、芝居風の演出が常だった。それを噺一本で演じたのが圓朝だったのである。

これが落語の基本の型となる。

かように、落語を語るに、明治は避けて通れない。

### 落語が文学を変えた

古典落語に「死神」がある。六代目三遊亭圓生や最近では柳家小三治、柳家喬太郎が十八番の噺である。死のうとした男の前に死神が現れて、枕元に死神がいたら助からないが、足元にいる場合は呪文で追い払える、と教えるあの落語である。本書によれば、この落語も明治の創作。しかもイタリアのオペラ「靴直しのクリピスア」かグリム童話「死神の名附親」という。いずれにせよ欧米作品の翻案だというわけだ。明治は西洋文化が大量流入した時代だが、落語もまたその波をかぶっていたのだ。その落語は、日本の文学をも発展させた。言文一致体の嚆矢は二葉亭四迷といわれるが、四迷が圓朝の落語の速記を参考にしたのは有名な逸話だ。

近代文学の代表は夏目漱石だが、著者によれば「吾輩は猫である」は落語の手法で書かれているという。実際、漱石は落語に傾倒した。時代の移行期、庶民は「笑い」を求め、それに応えるべく、落語が磨かれていったのである。



『明治維新と噺家たち 江戸から東京への変転の中で』 柏木新著 本の泉社 (03・5810・1581) 2200円